氏　　名　榎本文雄（えのもと ふみお）
学位(専攻分野)　博　士　(文　学)
学位記番号　論文博第375号
学位授与の日付　平成12年1月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　『雑阿含経』の文献学的研究

論文調査委員　(主査)教授 御牧克巳　教授 徳永宗雄　教授 荒牧典俊

論文内容の要旨

『雑阿含経』は，漢訳された初期仏教経典の一つで，パーリ語のSaṃyutta-Nikāyaと共通する起源から発展したテキストである。本論は，『雑阿含経』に関する従来からの問題点と新たな問題点に焦点を当てて論じる。

（1）『雑阿含経』全体の諸問題

『雑阿含経』の漢訳者は，従来，求那跋陀羅（Guṇabhadra）とされてきた。しかし，6世紀前半に書かれた『出三蔵記集』の記事から，実際に『雑阿含経』の翻訳を行ったのは宝雲であり，求那跋陀羅はその原典を唱えたに過ぎないことが判明する。『雑阿含経』の漢訳年代は，従来は唐代の『古今訳経図記』に基づきA. D. 435年から443年の間とされてきた。しかし，『出三蔵記集』とそこに収められた『勝鬘経序』の記録により，『雑阿含経』の「訳出」は435－436年であると新たに特定できる。

『雑阿含経』の原典はスリランカで伝承されていたという説がある。それは，6世紀末の『歴代三宝紀』が，道慧の『宋斉録』を引用しつつ，『雑阿含経』を法顕が将来したものと記し，一方，法顕将来の『雑阿含』の出所がスリランカであることによる。しかし，『歴代三宝紀』に引用される『宋斉録』の記事は事実と異なる情報を含み，信頼性に欠けるものが多く，この『雑阿含経』に関する『歴代三宝紀』の記事自体も『出三蔵記集』等に記される諸事実と矛盾する上に，当時の仏典訳出経過からも不自然である。以上のことから『歴代三宝紀』の記事は否定され，『雑阿含経』の訳出に関った求那跋陀羅自身が『雑阿含経』の原典の将来者であったと推定される。さらに，求那跋陀羅は中天竺出身と伝えられていることから，『雑阿含経』の原典も中天竺で伝承されていた可能性が濃い。また，当時の阿含経典の訳出状況から，『雑阿含経』の原典は写本ではなく，求那跋陀羅が中天竺から暗誦してきたものと推論される。以上の推論は『雑阿含経』の内容自体が中天竺に位置するマトゥラーとの密接な関係を示す点と相応し，『雑阿含経』と同系統の『根本説一切有部律』にもこのマトゥラーとの関係が見られる。

『雑阿含経』の原典の題名は，『雑阿含経』と同じ系統と考えられる『根本説一切有部毘奈耶雑事』とそのチベット本の記事からSaṃyuktāgama（SĀ）であると確認される。『雑阿含経』の原典の言語は，そこに散在する音写語の厳密な検討から，ガンダーラ語やプラークリット一般ではなく，広い意味でのサンスクリットであった可能性が高い。説一切有部では，初期にはテキストの言語を中期インド語のガンダーラ語で伝えていたことが諸文献（刻文も含めて）から知られるが，ある時期からそれをサンスクリットに変えていく。その変化の時代的・地域的過程を解明する上で『雑阿含経』の原典の言語は重要な事実となる。正確な年代を確定することに困難を伴うインド語資料に対し，『雑阿含経』の原典の場合は，求那跋陀羅が将来したと考えると，413年から435年までのある時点において中天竺の恐らくマトゥラー付近で伝承されていた可能性が高いからである。

（2）『雑阿含経』と「説一切有部」

(2.1)「根本説一切有部」と「説一切有部」

『雑阿含経』の原典の帰属部派は根本説一切有部（Mūlasarvāstivāda）系であるとする研究が近年積み上げられてきた。そして，この根本説一切有部という部派が説一切有部と如何なる関係にあるかが問題とされ，様々な学説が提出されてきた。

ところが，古来の文献において，「根本説一切有部」という語，そのインド語“Mūlasarvāstivāda (-din)”，そのチベット訳“gŹi thams cad yod par smra ba”が，それぞれ「説一切有部」，“Sarvāstivāda (-din)”，“Thams cad yod par smra ba”と如何に区別されて使われているかが確認されたわけではなかった。まず，この点を検討する。

遅くとも8世紀の人と考えられているŚākyaprabhaのĀrya- [Mūla] sarvāstivādi-śrāmaṇerakārikāvṛtti Prabhāvatīのチベット訳に於て，「根本説一切有部」とは諸部派の「根本」である「説一切有部」であると明言されている。このことから，「根本説一切有部」は「説一切有部」と同一のものを指していた事実が判明するとともに，「根本説一切有部」とは「説一切有部」が用いた自派の尊称と考えられる。Prabhāvatīなどのチベット訳の諸テキストの題名とコロフォンの比較からも「根本説一切有部」と「説一切有部」との間に区別のないことが知れ，この点はチベット訳仏典一般の常識ともなっていたと考えられる。

明確に年代が特定できる文献において最初に「根本説一切有部」等の語が登場するのは，7世紀後半のインドの状況を記述する義淨の『南海寄帰内法伝』であるが，この書においても「説一切有部」は「根本説一切有部」とは何ら区別されていないことが判明する。また，この文献において，『十誦律』が「根本説一切有部」ではないと記されている点も，「説一切有部」と「根本説一切有部」とを区別しているものと理解する必要はなく，諸部派の根本となった本来の形の律は『十誦律』ではないという趣旨と考えられる。

8世紀末に書かれた円照の「大唐貞元新訳十地等経記」においても，「薩婆多」すなわち「説一切有部」は「根本説一切有(部)」と同一視されており，8世紀前半の可能性が高いVinītadevaのSamayabhedoparacanacakre Nikāyabhedopadarśana-saṃgrahaのチベット訳における「根本説一切有部」も，「説一切有部」という「根」がそのまま「枝」となった，「根」である「説一切有部」という意味だと考えられる。

インド語資料には「根本説一切有部」への言及は殆どないが，Śrīghanācārasaṃgrahaṭīkā Sphuṭārthāの中にmūlasāṃghikaという語があり，この語の用法からMūla-sarvāstivāda「根本説一切有部」もmūla＝Sarvāstivādaというkarmadhāraya compoundと見做すことができる。

このように「根本説一切有部」と「説一切有部」とが同一であることが判明したことで，従来の解釈では問題となった以下の諸事実が矛盾なく説明できる。まず，ŚāntidevaのŚikṣāsamuccayaのSarvāstivāda「説一切有部」への言及と共にそのテキストが引用されるが，その内容は，『根本説一切有部律』に基づいて成立したDivyāvadānaの一部に相当する。Nālandāで出土し，推定では9世紀の刻文に，Nālandāにおける「説一切有部」の比丘に言及するものがあるが，義淨によると，7世紀後半のMagadha (Nālandāを含む) では「根本説一切有部」が最も盛んであり，義淨が将来した『根本説一切有部律』等の仏典はNālandāで求めたものであった。7世紀前半の玄奘訳の「説有一切部」の諸文献に『根本説一切有部律』に見える教理との一致が見られる。PrajñāvarmanのUdānavargavivaraṇaのチベット訳のコロフォンで，Prajñāvarmanが『「説一切有部」Thams cad yod par smra baの比丘』と呼ばれ，一方Udānavargavivaraṇaは『根本説一切有部律』系である。カシュミールは「説一切有部」，とりわけVaibhāṣikaすなわちVibhāṣā (『婆沙論』) を奉じる人々の本拠地であったことはよく知られているが，「根本説一切有部」の律のチベット訳コロフォンによると，カシュミールVaibhāṣikaも8－9世紀には「根本説一切有部」と称されている。

「根本説一切有部」という名称の最初として，その著作のチベット訳テキストのコロフォンにある「根本説一切有部」への言及から注目されているGuṇaprabhaも，彼のインド語テキストの既出版のものには「根本説一切有部」への言及はなく，Guṇaprabhaの時代に「根本説一切有部」という名称が存在していたとは確定できない。したがって，義淨が「根本説一切有部」に言及する人物として確実な最初の人となる。かくて，7世紀後半から「根本説一切有部」という名称が登場したと推定される。

このように，「根本説一切有部」と「説一切有部」が同一である以上，『根本説一切有部律』『十誦律』の両者とも「説一切有部」所属であり，この点では両者は区別できない。したがって，「説一切有部」内部に2種類の律が存在したことになる。『大智度論』の「魔偸羅國毘尼」と「罽賓國毘尼」の記事も，両者が部派の違いとは位置付けられず，後者は『十誦律』に相当することから，同じ時代に地方によって異なる律が「説一切有部」内部に存在したことを示すと考えられる。すなわち，律を異にする分派が「説一切有部」内部に存在したこととなる。したがって，『根本説一切有部律』やそれと密接な関係を持つ文献群は，従来のような根本説一切有部所属ではなく，「説一切有部」内部の一分派所属と呼ぶべきである。その際，その

分派の呼称は，テキストでの用法に反する根本説一切有部ではなく，「中央有部」と呼ぶこととする。

(2.2)『雑阿含経』の「説一切有部」中の位置付け

「説一切有部」文献は，律のみならず経典や教義にも亙って多様性を示し，内部に複数の分派が存在したと考えられる。そこで，『雑阿含経』を基準として，「説一切有部」諸文献の相対的関係を考察し，同時に，『雑阿含経』の原典の「説一切有部」内部での分派的ならびに時代的位置付けを行う。

『中阿含経』，『尊婆須密菩薩所集論』と『雑阿含経』との平行部分の内容の相違から，『雑阿含経』に反映されている5世紀初頭の中央有部のSĀ伝承は，4世紀末のカシュミール有部の阿含や，遅ければ4世紀後半のガンダーラ付近のSĀとは異なり，多くの点でそれらより発展した伝承であったことが明らかになる。

次いで，中央有部内部での『雑阿含経』の原典のより正確な位置付けを試みるために，第3篇の『雑阿含経』とインド語テキストとの対照表を用いて，『雑阿含経』と「説一切有部」の諸インド語テキストとの関係を考察する。

まず，Udānavarga（Uv）には3伝承があることが解明されているが，その中の古伝承（Uvs）よりも発展した中央有部の伝承とほぼ完全に一致した読みを『雑阿含経』はもつ。Avadānaśataka（Avś）と『雑阿含経』の対応部は，現存の『雑阿含経』の原本よりも新しいSĀがAvśへ挿入されたものであるという研究があるが，そのことは他の事実からも傍証される。また，その際に『雑阿含経』はAvśよりもMahāparinirvāṇasūtra（MPS）と読みが一致する。Abhidharmakoṣabhāṣya（Abhidh-k-bh）に含まれる『雑阿含経』との引用・平行箇所は，現在の『雑阿含経』の原文よりも新しい発展段階にあるものと推論される。Āyuḥparyantasūtra（Āps）と『雑阿含経』との平行部分では，Āpsの方が『雑阿含経』の原文より新しい発展段階にある。『雑阿含経』は，従来の根本説一切有部という名称そのものの母体であった『根本説一切有部律』に属するSaṅghabhedavastu（Saṅghabh）よりも，東トルキスタンからその写本が出土したCatuṣpariṣatsūtra（CPS）と読みが一致する。このように，東トルキスタンで伝承されていたCPSとMPSが『雑阿含経』とよく読みが一致するが，東トルキスタンでその写本が発見されたものでも，SHT4, 50やSHT5, 1250の写本は『雑阿含経』とは読みや構成を異にしている。

以上の考察の結果を『雑阿含経』の原典を中心として示すと以下のようになる。

- 『雑阿含経』の原典以前のテキストである，あるいはそれの読みを基に別方向に発展：Uvs, SHT4, 50。
- 『雑阿含経』の原典と同じ発展段階：CPS, MPS。
- 『雑阿含経』の原典以上の発展段階：Āps, Avś, Abhidh-k-bh, Saṅghabh。

(3)『雑阿含経』*Saṃgītanipātaに相当するインド語テキストと『雑阿含経』との対照表

「説一切有部」の諸インド語文献の中に，『雑阿含経』の*Saṃgītanipātaに対応する箇所（筆者が初めて同定したものも含む）を収集し，それらを『雑阿含経』と対照表にしたものである。

論文審査の結果の要旨

原始仏教聖典には，「四部四阿含」と通称されるように，南方上座部（Theravāda）にパーリ語で伝わる「四部」の経典，つまり『長部』（Dīgha-nikāya）・『中部』（Majjhima-nikāya）・『相応部』（Saṃyutta-nikāya）・『増支部』（Aṅguttara-nikāya）と，夫々別の部派によって保持されてきたとされ，漢訳として現在に伝わる「四阿含」，つまり，『長阿含経』（Dīrgha＝āgama）・『中阿含経』（Madhyama＝āgama）・『雑阿含経』（Saṃyukta＝āgama）・『増壱阿含経』（Ekottarika＝āgama）がその主要部分を形成するものとして存在する。近代学問としての原始仏教研究は，19世紀後半以来，イギリスのパーリ聖典教会によるパーリ聖典の校訂出版とともにはじまり，パーリ聖典の文献学的・思想史的研究を中心に進展してきた。我が国においては，早くからパーリ聖典を，漢訳仏典と比較対照して批判的に研究する必要が認識され，そのような方法論にもとづく漢巴対象の思想史的研究が主流になっていた。しかるに戦後四，五十年の間にゲッティンゲン大学のワルトシュミット教授とその門下によって，中央アジア出土サンスクリット写本群が陸続，校訂出版されて，ほぼ全体が公刊されるに至り，またケンブリッジ大学のブラフ教授によっては，ガンダーラ語の『法句経』が校訂出版される等の画期的出来事があり，また，その後も現在に至るまで新発見がつづいているのであるが，現在では，それらを中心にすべての多言語による多伝承の原始仏典を比較対照して，これら諸伝承を相互に系統づけつつ遡って原伝承を究明するような批判的研究が，必須の課題となっている。

本論文は，この課題を深く認識した上で，原始仏典の中でも古層の韻文経典を多く含むと考えられるパーリ聖典『相応部』(Saṃyutta-nikāya）の「有偈篇」(Sagāthavagga）に対応する漢訳『雑阿含経』(Saṃyukta＝āgama）の「僧耆多篇」(*Saṃgītanipāta）について，そこにふくまれる諸経典，とくに古層の韻文経典の文献学的研究の為の基礎を確立することを目指したものである。本論文は三編からなる本論と既出論文の集成からなる附論とからなっているが，本論文が解明した新たな知見として，少なくとも以下の5点を挙げることが出きる。

第一に，漢訳『雑阿含経』は，従来は求那跋陀羅（Guṇabhadra）が435年から443年の間に訳出したとされてきたが，本論文により，訳出年代は435－436年と特定され，また，実際に翻訳を行ったのは宝雲であり，「中天竺人」求那跋陀羅は単に自らが暗唱してきた原テクストを翻訳に際して唱えたに過ぎないことが明らかになった点である。

第二に，漢訳『雑阿含経』の原テクストは，「説一切有部」系の諸伝承の中でも「中天竺」のマトゥラーと密接に関係するに至った伝承を伝えるものであり，原典の言語は，ガンダーラ語やプラークリット一般ではなく，サンスクリットであった可能性が高いことを，音写語の厳密な検討によって論証したことである。

第三に，漢訳『雑阿含経』は「根本説一切有部」系の原テクストに由来するとする従来の定説に関連して，「根本説一切有部」と「説一切有部」の関係を徹底的に究明した点である。つまり，従来の説によれば「根本説一切有部」は「説一切有部」とは全く別な新しい部派と考えられるのが常であったが，論者は，現在までに知られている限りの「根本説一切有部」という語の用例を，逐一，検討して，「根本説一切有部」とは「諸部派の根本たる説一切有部」の意として，「説一切有部」が他の部派の根本として自らを呼ぶ時の自尊呼称であり，しかもかなり後代（7世紀後半以後）のものであって，「根本説一切有部」が決して「説一切有部」と別の部派を指すわけではないことを明らかにした。これによって，「根本説一切有部」と「説一切有部」が二つの別の部派だと考えることによって生じていた従来の諸々の矛盾点はすべて解消されることとなった。

第四に，本論文の最大の功績として，第3篇「『雑阿含経』*Saṃgītanipāta に相当するインド語テキストと『雑阿含経』との対照表」を挙げることが出来る。これは，漢訳『雑阿含経』の「僧耆多篇」に含まれる総数132経に及ぶ多くの漢文経典について，中央アジア出土サンスクリット文献（ごく微細な断片もふくめ数千点に及ぶ）や，既刊の多数の経・律・論にわたるサンスクリット文献などを博捜して，引文を同定し，かくして回収されたインド語テクストを対照表にして提示したものである。それは他の研究者によって同定されたものも併せ集成しているが，全体の3分の2以上は，論者自身がはじめて同定したものであることは特筆に値し，論者の学識と努力が十二分に示された，今後の原始仏教研究の基礎となる貴重な業績である。

第五に，附論「説一切有部の阿含経典関係論文集」は，本論を補足するために，論者が従来出版してきた論文14点をまとめて提出したものであるが，『長阿含経』『中阿含経』『雑阿含経』『僧壱阿含経』について，現段階までの最新の研究成果を要約しつつ概観するとともに，とくに『雑阿含経』の「僧耆多篇」のいくつかの経典について論者が行い得た典拠の同定を中心に文献学的研究を試みたものであり，今後の原始仏教研究への道を開くものとして極めて重要である。

しかし本論文にも問題点や要望すべき点が無いわけではない。問題点としては，上述したように本論文第三篇は原始仏教研究上高レベルの貴重な労作なのではあるが，典拠を示す注の仕方にもう一工夫あって然るべきであった点を指摘出来る。些細な点であるが，論者の研究が今後世界の原始仏教研究の基礎を形成するという重要性に鑑みても特に強調しておきたい。要望すべき点の第一としては，研究の次の段階として，パーリ伝，「説一切有部」伝の漢訳が対応するところの原伝承の古層の韻文経典そのものを研究して，原始仏教経典の発達の諸層を解明しなくてはならないという点である。第二としては，論者が本論文中に取り扱ったのは集中的に『雑阿含経』の「僧耆多篇」であるが，同じ試みを『雑阿含経』全体に，延いては四阿含全体に拡大し，その上で，原始仏教思想の諸概念の一々の意味を確定し，その思想的発達を解明してもらいたいという点である。しかしながら，問題点は注意深く改善すればすぐに解決できる問題であり，要望点は所謂「望蜀の言」であって，もとより本論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年8月6日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。